



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	空想のアイドルグループの中で生きる女子中学生への治療的関わり : 作話の心理的根拠を巡って
Author(s)	澤田, 愛子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 4, 13-22
Issue Date	1991-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37525
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_13-22.pdf



空想のアイドルグループの中で生きる女子中学生への 治療的関わり

—— 作話の心理的根拠を巡って ——

澤田 愛子

Therapeutic Process of a Junior High School Girl Who Lives in a Fantastic Idol Group —— On Psychological Causes of Her Making Fictions ——

Aiko Sawada

Abstract

In this article I'll present you one year and five months' therapeutic process of a junior high school girl, who at the beginning was diagnosed psychogenic deafness, and my analysis points of this case. Her psychogenic deafness was soon cured, but the main problem found in the following process was her tendency of making fictions. In front of her compassionate therapist she made fictitious 8 members group in her fantasy which was similar to a real idol singers group and at last she herself became an idol in her fictions. We can think of various psychological causes of her making fictions. In this case it is important to think especially of her hunger for affection and recognition. Therefore escaping in her fantastic world, she dissolved frustrations and recovered emotional stability, I think. I didn't view this tendency as a pathological phenomenon, rather, I used its efficacy for therapy. And I penetrated an attitude of compassion, then I could terminate this therapy. I guessed that this therapeutic relation made preparation for her present friendship.

要 旨

本論文は、心因性難聴を契機として神経科に来院した女子中学生との1年と5箇月にわたる面接過程の全容と考察をまとめたものである。心因性難聴は面接を開始した当初既に軽快していた。けれどもその後の治療的関わりにおいて判明した問題点は、少女には虚言癖ないしは作

話癖がみられることであった。少女は共感的な治療者を前に、しだいに固定化した8人グループを空想の中で結成し、現実のアイドルグループの姿に重ね合わせることによって、ついに自らも空想の中でアイドルとなってしまったのである。こうした作話をなさしめたものは何か。それには何よりも家庭状況や学校状況における愛情と認知への飢餓感が考えられた。従って空

想の世界に逃避することによって、自らの欲求不満を解消させ、情緒的安定を得ていたものと考えられる。筆者はこれを病的現象とみなさず、むしろその利点を活用し、最後まで共感の姿勢を貫くことによって、治療を終結させることができた。筆者との関わりはその後の友人獲得の為の橋わたしの役割をはたしたようである。

はじめに

思春期^{さなか}の最中にある中学生が、アイデンティティを達成するまでの混乱の時期にあって、夢や空想へと逃避することは、よく知られた現象である。彼（女）等は時には日記を通して、時には物語りを通して自分の夢を描写してみせる。けれどもそれらの多くは、あくまでも夢物語として表現されるのであって、現実の事柄として語られるのではない。もしそれをあたかも自分に生じた現実の出来事のように語る若者がいたとしたら、我々はそれを如何に考えたらよいのであろうか。筆者が以前出会った少女の事例は、まさにこれに相当するものであった。少女の来院の直接的動機は軽度の心因性難聴によるものであったが、それはすぐに消失した。それよりもその後心理療法の過程において明確になっていった問題点は、上述したような作話癖ないしは虚言癖にあったのである。筆者はこの問題に大いに悩まされることになった。いったい何が彼女をしてそうさせていたのであろうか。本事例の心理療法は既に1年前に終了している。けれどもその後も本事例が筆者の脳裏から離れがたく、色々と考えを巡らせてきた。ここに事例の経過報告と共に、考察点を紹介し、読者諸氏からの御教示をいただければ幸いと願っている。

事例

A子。来院時はB中学校2年。学校の身体検査時に軽度の右難聴を指摘され、又本人の自覚もあり、昭和63年5月にC病院耳鼻科を受診。

心因性難聴を疑われてフォローされていたが、同年9月に同院神経科に紹介来院となった。その時点で既に難聴と、同時にみられた不潔恐怖（2箇月ほど前に砂場等で遊んだ後入念に手を洗う、他人の入った後の風呂を嫌がる等。）も収まりをみせていた。

来院時の心理検査では、WISC-Rで全検査IQが55にて軽度精神薄弱（遅滞）者クラス、言語性検査IQが53でこれも同レベル、しかし動作性検査IQは72で、境界域との結果がでている。一方ロールシャッハ及びPFスタディ（絵画欲求不満テスト）、Y-G性格検査等では、知的レベルからは想像もできぬ程の空想力の豊かさと、内的世界への閉じ込めり傾向、さらに人間関係における不安定さと社会性の未熟、フラストレーションに対する耐性の乏しさや他罰傾向等々が指摘された。又筆者自らが施行したHTP（描画）テスト（特にBaum-樹木画テスト）においても、そうした性格傾向と共に、内面の傷つきやすさや不安定感等、現在の家庭生活に何らかの問題が生じている兆候も恒間みられた。

A子の両親は10年前に離婚。上に姉がひとりいるが、その姉は最初父方につき、A子が小学校5年の時に母方に戻って、以後はマンションでの3人暮らしとなっている。その姉はA子の来院時には高校生であった。母親は夜スナックで働き、夕方の6時から7時には家を出て、深夜に戻るという生活パターンが続いている。

経過

1年と5箇月間にわたる治療期間を便宜上3期に分けて報告をする。なお筆者との出会いは、主治医との数回にわたる面接の後に、主治医からの紹介という形で行われた。その後筆者は主治医のアドバイスを受けつつ、本事例に関わっていった。

第Ⅰ期(1回～8回,昭和63年11月2日～平成1年3月3日まで)

A子は初回面接から、筆者の前では比較的情緒的安定を保ち落ちついていて、これは治療の終結期まで変わることはなかった。学校は休むこともなくずっと通っていたが、時々腹痛等を訴えていた。その為11月下旬に1週間ほど検査の為に某病院の内科に入院をしている。検査の結果に異常はみられなかったものの、その後もしばしば腹痛を訴え、学校の保健室へ行っは、養護教諭の先生と話をしながら、しばしの時を過ごしている。この腹痛は明らかに心因性のものであったが、それはA子にとって学校が楽しくなかったことと関係をしていて、何故楽しくなかったのか。それは勉強が全然わからなかったということよりも(一年時の英語のリーダーが全く読めず、分数、少数の計算等もできなかった。)、むしろ友達がなかなかできないことと関係があるらしかった。前者に関していえばA子は全然気にはしていなかったのである。

筆者との面接は、最初の4回は話のみで終わった。しかしA子にとっては、話をするだけで終わるよりも、ゲーム等を取り入れて進めていった方がよいのではないかという判断により、5回目からはゲーム(特にトランプゲームの神経衰弱が中心で、その後は毎回のようにこれを行った。筆者は飽きはしないかと思ひ、他のゲームも用意したところ、本人はあまり関心を示さなかった。神経衰弱はめっぽう強く、実に数字をよく覚えていて治療者を驚かせることもしばしばであった。)や本人の希望で、アイドル達のBGMも入れて(カセットとテープは本人が持参。)面接を進めていったところ、よりリラックスして彼女なりの打ち明け話をしてくれるようになっていった。

A子が興味を示した話題は、アイドル達、とりわけ光ゲンジとクラスのY君の話、そして猫や幽霊の話であった。そういう話をする時のA子の目は輝いてみえた。この中でも特に光ゲン

ジとY君の存在は、A子にとって心の拠り所であるらしかった。とりわけY君の存在は、アイドルスターと重なり合っ、A子のほぼ全関心を占めていた。それで、失恋をするとは思っけど、今お母さんに内緒でセーターを編んでいて、クリスマスにプレゼントをするつもりだとか、学校は楽しくないが、Y君に会う為に通っている。でもライバルがたくさんいて私なんかかなわないだろうと、楽しそうに語ってくれるのであった。友達に他のクラスに数人いたが、カセットテープを貸しても返してくれなかった。それで喧嘩をしてもう口をきかなくなった。クラブは4月にブラスバンド部に入ったが、練習がきつくてやめた。その後演劇部に入ったけれど、先生はちゃんとした役割を与えてくれないし、いじめる人もいてもう行っはいいない等々、友人関係の希薄さを物語る話が続いた。後に母親が話したところによれば、友人がいないのは、本人が我が儘過ぎるからなのだという。自分の思うようにゆかないと、それをいじめられたと受け取ったり、家にせっかく友達がきてくても、自分ばかりを主張するので、すぐに駄目になってしまうのだろうということであった。又、A子は家も楽しくないと口にしていて。お母さんはお姉さんと私を差別し、私に冷たくする。だからお母さんとはあまり口をきかない。小学校の時、一度反抗したら、出てゆきなさいといった。それで出て行っ夜も帰らなかったら、お母さんが捜索願を出した等々。このあたりの話はほぼ真実であるらしかった。それに知らないおじさん(母親の愛人)が家にずっといて、その人そんなに嫌いではないけれど、お姉さんにだけよくしている。こんな話をアイドルのBGMをかけながら、それほど表情も変えずに、特にニコニコしながら語ってくれたのである。

こうして冬休みを迎えた。冬休み明けには、友達と光ゲンジの映画を見にいった等と楽しそうに語ってくれた。しかしながらある日のこと、

母親を通して、その時の治療者にとっては意外とも思われる事実が判明した。A子には以前より盗癖があり、家のわかる所に決してお金を置いてはおけないこと。だから出かける時には、必ず金品をA子の知らないところにしまうこと。又、街で万引きをして補導をされたこともあり、この冬休みは、カセットを万引きして警察に補導をされた。又、苛立った時には、家のカーペットに火をつけたこともある為に、これ又、母親が出かける時には姉によくいい、ライター等を隠して出かけること。あるいは小学生の時にタバコを吸ったり、家出もしたことがあった事実等々。けれども2月に入ってからはいくつかの非行はなくなり、母親とも口をきくようになり嬉しく感じていること。そして情緒的にも比較的安定してきたようだ。それに腹痛も、もう訴えない。しかし話の埋め合わせをする為に、時々嘘をつく癖は直らないとも母親は語ってくれた。以前他のクラスの女子とデパートに行った話も作り話であったし、学校を早退してきた時に、お母さんとホテルで食事をする事になっているからと嘘をついて帰ってきたこと等もあったという。最後の虚言癖については、筆者もこの時期、思い当たるふしもなかったわけではないが（例えば一晩中道端で野良猫の看病をした話等。）、お、むねA子の話を信じてしまっていたようだった。

第Ⅱ期（9回～16回、平成1年3月16日～8月25日まで）

A子は治療者に慣れるに従って、治療者を慕い、面接のたびごとに彼女の宝物（アイドル達の写真集やスクラップ集、テープ、クラスの写真等々。）を持参してきては、誇らし気にみせてくれるといった日々が続いた。けれどもこの時期に至って、A子は治療者との親しさの中で、その後治療者を悩ますことになった派手な交友関係の話を始めるようになったのである。最初、Y君を中心とした同クラスの不特定な複数

グループに加わって活動をする話であったが、それがしだいに固定化してゆき、ついには彼女を加えた不動の8人グループの結成に至った。そのグループの構成メンバーは、A子を入れた女子3人とY君を中心とした男子5人であった。男子5人は、それぞれ幾分か光ゲンジのアイドル達に似ているのだという。

彼女が物語った内容は、具体的にはまず、春休み中の数日間にわたるY君宅での合宿物語からであった。そういう合宿計画のあることを前もって筆者に伝えておいてくれた為に、次の面接日にそのことを尋ねると、A子は一気に体験を語ってくれたのである。所々に表現の誇張はあったものの、内容は具体性に富み、目を輝かせて能弁に語ってくれたこともあり、筆者はほぼ信じてしまっていたようである。Y君の家は大きく、両親はお金を置いて旅行に行ってしまった。そのお金でセブンイレブンに行って食べ物を買ひ、みんなで作って食べた。夜はお化け大会をした。（このお化けの話は、A子の得意なテーマであった。入院中にもお化けをみだし、自分の部屋にも入ってきたことがある。お化けが好きだと嬉しそうに語ってくれた時もある。）そしてみんなでごこ寝をした。又、外でボール蹴りをして遊んだといって、絆創膏の貼ってある手をみせてくれたりもした。後日それらが全くの嘘であるとわかった時、治療者としての筆者は少なからず動揺をした。今までの話からも時々誇張がみられ、又母親からも嘘の多い子であると聞いていながらも、内心はA子を信じていたと思っていた為であろうか。A子の話と演技にすっかり騙されてしまっていたのだろうか。

その後彼女は話題の中で、この固定化した8人グループとはほぼ全行動を共にするようになっていった。気候もよくなったので、外を散歩したこともあったが、スポーツやゲームもそこそこ、A子の話はすぐにこの8人グループに移っていった。治療者はA子の話を否定することなく受け容れ、そうした話をしたがるA子の

気持ちへの共感に努めていった。その為か、しだいに作話はエスカレートをしてゆき、そのグループはしばしばY君宅で合宿をするようになっていった。そして合宿の内容も、Y君の両親と8人グループの温泉パレスへの旅行、それに夏休み中の担任を混じえた学校合宿物語へと拡大をしていった。このグループは、光ゲンジのようなアイドルを目指して、放課後、歌や踊りの練習もするようになった。先生達は応援をしてくれていて、高校だけが進む道ではないぞという。そしてついには8人の為の全校コンサートが開催されるまでになった。もうこの段階で完全にアイドルになってしまったのである。Y君が一番人気があり、A子もリード・ボーカルで男の子達に人気があると嬉しそうであった。実際にこれが私の歌であると、吹き込んだというテープを聞かせてくれたりもしたが、どうしても素人のものであるとは思われなかった。しかしながら治療者が上手ね、というと、A子は少し顔を赤らめて下を向くのであった。一方このグループは時々悪さもし、夜間に窓ガラスを割って学校に忍びこんだり（この「忍びこむ」という表現はA子の好きなことばのひとつであった。）、夜間にはしごとをつたって家を脱出し、野原に集合して、ウルを待ちぶせたり、他校の女子生徒と乱闘騒ぎを起こし、警察ざたになったりして、バイオレンスグループと呼ばれているとか。それでも校長先生をはじめ、先生方は元気があっていいぞと励ましてくれる、といかにも誇らし気に語ってくれるのであった。

3月の終わり頃より、治療者はA子のこんな世界に最後まで付き合うことになったのである。それまで学校は楽しくなく、あまり友達はいないと語っていたA子に、いったい何が起こったのであろうか。作り話の可能性が高いことを感じながらも、一部真実もあるかもしれぬと感じた筆者は、念の為に母親や担任に確認を試みたところ、やはりそうした事実はある得

なく、現実の交友関係は非常に希薄であるとの証言が得られた。そういえば、A子が治療者にみせてくれた修学旅行時の写真では、A子の話題の威勢のよきとは裏腹に、ひとりぼっちか、あるいは担任と一緒に居るA子の姿が数多くみられた。担任（男性教師）もA子のことを色々と考えてくれていたようで、一時交換日記の試みもしたということであった。しかし後になって、ひとりの生徒にばかり気を使うのはよくないのでは、とのおもいから、それをやめたところ、A子からは脅迫まがいのことばも聞かれ、僕にはもう重すぎるといっていたという。しかしながら治療者に語ってくれる作話の世界がエスカレートしていった頃より、A子は家で情緒的に安定し、母親とも親しく口をきくようになり、盗癖等の非行もほとんどみられなくなっていった。この両者の関係には興味深い相関が感じられた。

最後に性的な事柄に関していえば、A子の話の中には、その興味からくる話題が時々含まれていたのが気になっていた。おゝむねそれは現実離れをしたものであったが、光ゲンジのあるアイドルと同棲をした夢をみたとか、関係をして子供も生まれた等といって、その子供の絵を描いてくれたこともある。ある時には、妊娠をしたらどうなるのと聞いてきて、治療者は少々ドキリとさせられた。年齢からいって、異性に興味を持つことは当然の現象であるが、無知故の誤ちを起こし得ることもあるわけで、治療者としては注意の必要性を痛感した。母親の話によれば、性的などぎつい写真や、猫の首がとれているそうした類のホラー画に興味深そうにみていることもあるそうで、心配な様子がかがえた。

第Ⅲ期(17回～23回、平成1年9月28日～平成2年3月27日まで)

A子の作話に悩んだ筆者は、Ⅱ期の終わり頃より、A子の気持ちを受容しつつも、それとな

く話の矛盾点をつき始めていた。例えば次のようなことばのやりとりをしている。

例1…8人グループが担任を混じえて、1週間学校で合宿をしたという話の時に、「ごはんはどうしたの。」…「みんなで作った。」「お金をもち合ったの。」…「あっ、先生がね、ビーフステーキを御馳走してくれたの。」「8人分も。先生ずい分とお金もちね。」…「うん」

例2…「それから火曜日に開かれたという学校のコンサートだけど、授業はあったんじゃないの。」…「あっ、その日は学校の授業、私達の為に休みになったの。」

例3…「夜中にね、あなたが家から抜け出すということだけど、お母さん、あなたの靴のないのをみてわかるんじゃないの。」…「別の靴を置いておくからいいの。」「ふーん、でも帰ってらして、あなたの部屋をみて、あなたがいないの、すぐわかるでしょ。」…「でも等身大のお人形を寝かしておくからいいの。」

例4…「今朝家で何時に起きたの。」…「7時頃」「でもさっき、ずっと学校で泊まり込んでいるってじゃないの。」…「ああそうか。学校で7時に起きたの。」等々。

A子は矛盾をつかれても、あまり表情を変えずに、ケロリとしていることが多かった。

けれどもある日のこと、A子は初めて治療者に対して、抵抗らしきものを露わにしたのである。前々からA子は高校よりも芸能関係に進みたいと、東京行きの望みを語っていた。おそらくこれはA子の幼いながらも本心であったであろう。そして芸能人の多いH高校に行きたいけれど、担任が無理だという。それで卒業したら、タレントのいっぱいいるフジテレビの近くの喫茶店で働きたいと語っていた。A子としては、精一杯の現実感をもたせた望みであったことであろう。ところが治療者はある日のこと、その望みを、「東京はね、こわいところよ。」と否定をしてしまったのである。性に関する興味を口にしていた時でもあり、治療者の中には何

がしかの懸念もあった。ところがその直後のこと、次の面接日を決めようとした時、A子は親類の家に行くことにしたので、次からはもう来られないと言い張ったのである。漁師をしているひとり暮らしのおばあちゃんを助けたいので、来週からそこに行くことにした。お母さんにはまだ話していないけれど、とのことであった。その日は次の面接日を約束しないまま別れたが、話の唐突性から虚言であることを感じとった筆者は、数日後にA子に直接電話をし、来院の快諾を得たのである。治療者の愛情を試してみたかったのだと主治医は語った。虚言や作話の背景にあるA子の心理を読みとった筆者は、A子に力を与えていると思われた作話の効用を逆に活用してみることにした。それ以後筆者は話の矛盾をつくことなく、再び全面的にA子の話を受容し、その気持ちにあくまでも共感の姿勢を貫ぬく決心をしたのである。

それからのA子は、以前にはみられなかった治療者への気づかいをみせてくれるようになっていった。例えば以前は乗り気ではなかったオセロゲームやジグソーパズルを自らやりましょうかといってみたり、又ある時には治療者の為にマフラーを編みましょと気を使ってくれたのである。ところで例の8人グループであるが、この抵抗を示した日に、もうむこうへ行ってしまうので別れることになるといって、いったん崩れかけたものの、次の来院日にはすぐ復活し、話題はますます不自然にエスカレートしながら、最後まで続くことになった。もともとこのグループは空想上のものであるのだから、一時的に崩れたのも、その日のA子の話のつじつまを合わせる為であったのであろう。

とはいえ、新年に入り受験が現実の事柄となってくるや、8人グループの登場回数も減少していった。A子は自分のゼロに近い成績や受験のことを全然気にはしていなかった。高校はお母さんが行けというから行くけど、自分はあまり行きたくなかった。でも少し行きたいと思

うようにもなってきた、と語った。卒業後の現実的な事柄を周囲からも色々といわれるようになり、多少とも気持ちがそちらへ傾いていくようになった為か、それとも8人グループの作話のネタがもう尽きそうになってしまった為か、徐々に現実的な話題が面接の中に登場してくるようになっていった。

そして3月のある日、A子はとある高校に入学を許可された。それは女子校であったが、近くに男子の工業高校があるからとA子は喜こんだ。非行行為も全くみられず、情緒的な安定も続いていたことにより、中学卒業をひとつの区切りとして、治療過程を終結した。8人グループの進学先は皆バラバラであり、別れることになるのであるが、さみしくはないと語った。高校で新しい友人に出会える希望がそういわせたのであろうか。又治療者との別れも比較的冷静に受けとめられたようである。出会いから1年と5箇月後のことであった。

考察…作話の心理的要因に関して

本事例のテーマであるA子の虚言と作話癖に関して、以下3項目にわたって考察を巡らせてみたい。

1. 現実からの逃避—愛情と認知されることへの飢え

母親の話しから、もともと話の埋め合わせをする為に嘘をつくこともあるというA子であったが、筆者の治療的関わりが進展し始めた頃より、何故かほどに派手で連続的な作り話をするようになったのであろうか。最初から結論めいた事柄を述べてみよう。これは治療者であった筆者の実感であるが、友人のほとんどいなかったA子には、その頃より治療者である筆者の存在が、ほとんど唯一の友になっていったのではあるまいかと考えられる。そしてその「友」の前で、おそらくはうまくいっている自分を見せ

たかったのであろう。その根底には、治療者を失いたくないという心理が多少とも働いていたように思われる。

こうした心理の背景には、A子にとっては苛酷とも感じられる現実からの逃避があり、それが空想の世界で、好きなY君を中心に8人グループを作りあげていったのであろう。そしてクラス内でおそらくA子のあこがれの的でもあったこの7人を、現実のアイドルグループに重ね合わせることによって、ついには自分達もアイドルとなり、かなわぬ夢を作話の世界で受肉化させ、そうすることによって、厳しい現実の中でかろうじて情緒の安定を得ていたものと考えられる。そうした空想の世界が共感的な治療者の前で、カッコよくみせたい心理ともあいまって、自由に表出されたのであろう。従って治療者が作話の矛盾をつき始め、彼女の望みの一端を否定することばを放った時、既述したあの抵抗的な態度となって表われたものと考えられる。この出来事は、現実を見抜かれそうになった治療者からの逃避というよりも、まさに治療者の愛情を試したのであり、それだけにA子は愛情や人から認知されることに飢えていたのであろうと筆者は解釈をした。その証拠に抵抗を示した日に崩れかけた8人グループは、治療者の愛情を確認した次の来院日には、すぐに復活をしているのである。考えれば、幼い日の両親の離婚や、その後の、夜間に母親のいない生活は、比較的感受性の豊かなA子の心を刺激してあまりあるものがあつたのではなかろうか。従って小学校5年になって、姉が父方より戻ってきた時に、母親の愛を奪われるかもしれぬと、以後は姉に対して対抗心を燃やしていくことにもなった。そしていつも意識内に、差別されている自分をみても悩んでいたに違いない。現実はずしもそうではなくとも、そこに内的な傷つきやすさからの被害者意識が多少とも働いていたとしても不思議ではない。ただ筆者が母親に接した限りの印象では、母親にA子に対する

満ち満ちた愛情が感じられなかったのも事実であり、自宅に母親の愛人と思われる男性が入りしっていた現実とも兼ね合わせて考える時、この事実はA子の心理的な不安定要因の一部を形成していたことと思われる。それに本人の自己中心的で我がままといわれていた性格の他に、彼女の一見動きの鈍そうな外観や、成績の低さ等も学校での孤独を形成し、それらも絡み合って、少女の感受性を刺激し続けていたに相違ない。ともかく彼女は愛情や他者からの認知に飢えていたのである。だから彼女の抵抗後、治療者が方針を改め、再度その気持ちを全面的に受けとめる方向に転換した時、彼女は以前見せなかった気づかいを治療者にみせたのであろうと思われる。

非行はこの愛情への飢えと無関係ではないように思われる。それに耐性が乏しく、幾分かは本能的に動いてしまう性癖も加わって、万引きやその他の行為に走らせてしまったのであろう。盗癖は彼女の抑止力のきかない欲求からきていたものと思われるが、家出や家のカーペットへの放火等の行為は、あくまでも母親の注意を、それ故愛情を引き寄せておきたい心理が背後に働いていたものとみられる。だから治療者がA子の気持ちを汲み取り、ひとりの友となるに従って、しだいに非行も収まりをみせていったのである。そこには人に認知されることへのそれ故愛情への飢餓感がしだいに満たされていった過程がうかがえる。

2. 本事例の病理性に関して

次にA子の虚言ないしは作話の病理性に関して若干の考察を試みたい。最初筆者は、A子の語るストーリーが全くの作話だと知らされた時には、少なからず驚きもしたし又ショックでもあった。それでこれがいわゆる病的虚言症(mythomania)そのものではないとしても、社会的には少女の将来に影を落とす兆候として、その是正に努めようとしたのである。この時点

で筆者は治療者というよりも、ひとりの教師ないしは道徳家になってしまったようである。しかしながらやがて作話の背後にある少女の心理的メカニズムと作話の効用が了解されるに従って、再度受容の方向へ楫を向け直したのである。A子は作話の世界と現実を混同して幻想の世界に住みついていたのではなく、明確に識別して、作り話と知りつつ筆者に語っていたものと考えられる。何故にそのようにしたのかは既述した通りである。そしてそれがA子をして情緒の安定と母親との対話、及びクラスメートとの対話の促進(担任教師の談)といったプラスの方向に導くものであっただけに、本事例は特異的ではあれ、必ずしも病理現象とはいえぬものではなかったかと理解をするに至ったのである。

ここでついでに「想像上の仲間」(imaginary companion)という主として幼児期から前青年期の健康な児童に発現しやすい心理現象との関連性について付言をしておきたい。本事例はその機能において、想像上の仲間との類似を想起させるものがあるが、A子の8人グループは決してそれと同一のものではなかったといえよう。なぜならば想像上の仲間が実体をもたぬ全くの空想上の産物であるのに対してA子の8人グループは、現実の存在であり、ただそれが空想上のストーリーを展開してゆくのである。けれどもその機能というかその効用においては、受け容れ難い現実を耐えさせたり、衝動の発散相手となったり、孤独感や拒絶感を癒す手だてとなる点において、想像上の仲間の諸特徴を共有するものがあり、この意味で類似しているともいえるのである。こうして筆者の作話に対する見解も治療的意味において、しだいに肯定的なものに変化をしてゆくことになったのである。この理論でゆけば当然ながら、現実仲間ができ、日々が楽しいものになってゆくに従って、空想上の物語りは減少をしてゆくことになる。

3. IQと作話癖について

最後にIQと本事例の相関を若干付言しておきたい。IQの低さは虚言ないしは作話癖と関係しているのであろうか。本事例に関していえば直接の関係は無かったものと考えたい。むしろその知能からは想像できぬほどの豊かな空想力を土台に、具体的なストーリーを展開しており、筆者は最初、すっかり信じ込まされていた程であったのだ。やはり本事例はIQというよりも心理的メカニズムを重視すべき事例であったと考える。少女が本事例で示した潜在能力を肯定的にとらえ、生かすことができれば、将来思いがけない道が開くこともあり得ると希望をしたい。IQという固定観念で若者をとらえぬことの重要性を学び取った次第である。

おわりに

本事例との面接過程を終えて1年が過ぎ去った。A子は現在高校2年生である。母親の話によれば、休まずに高校に通い、落ちついてきたそうである。友達もでき、家にもつれてくること。又欲求もある程度押さえられるようになり、少し性格が変わった。作り話もしなくなり、非行はその後もない等々、大変好ましい報告を受けている。短期間にすべてが好転することはあり得ぬとしても、母親の言を信ずれば、将来に希望がもてそうである。筆者の1年と5箇月にわたる治療的関わりが、その後の好結果に幾分か結びついたものと信じたい。今になって考えてみれば、あの時期の筆者はその後のA子の友人関係に橋わたし役を演じたのかも知れない。友も出来、現実が楽しくなれば、もうそれほど作話をする必要もなくなろう。作り話をしなくなったとの報告はそれを裏付けるものではあるまいか。まだまだA子の前途には多難な道程があろうが、ひとりの少女の未来を周囲の者が暖かく見守ってほしいと願わずにはいられない。

参考文献

- 1) 安部恒久：青年期仲間集団のファシリテーションに関する一考察，心理臨床学研究，Vol 1，No. 2，63-72，1984年，誠信書房，東京。
- 2) Bruno, F. J. : Dictionary of Key Words in Psychology, 82-83, 135, 194, 240-241, 1986, Routledge & Kegan Paul, London and N. Y.
- 3) 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉：想像上の仲間，精神科治療学，5 (11)，1435-1444，1990年，星和書店，東京。
- 4) カニグズバーグ，E. L. (松永ふみ子訳)：ぼくとジョージ，5-209，1989年，岩波書店，東京。
- 5) 中田 修：空想幻覚の一症例について，臨床精神医学，13(11)，1321-1326，1984年，国際医書出版，東京。
- 6) 中田 修・山上 皓：精神遅滞と非行・犯罪，臨床精神医学，13(6)，677-685，1984年，国際医書出版，東京。
- 7) 西園昌久：精神看護と精神療法，臨床精神医学，11，1539-1546，1982年，国際医書出版，東京。
- 8) 大原健士郎：生と死の心模様，1-62，1991年，岩波書店，東京。
- 9) 大嶋正浩・本間 修：精神遅滞と心理検査，臨床精神医学，13(3)，267-275，1984年，国際医書出版，東京。
- 10) 澤田愛子：思春期前期青年への治療的接近，看護教育，Vol. 23，No. 13，832-839，1982年，医学書院，東京。
- 11) 菅佐和子：思春期女性の心理療法，3-32，177-234，1988年，創元社，大阪。
- 12) 辻 仁成：ピアニシモ，3-158，1990年，集英社，東京。
- 13) 高橋雅春：描画テスト入門，63-117，1974年，文教書院，東京。
- 14) 高橋雅春・高橋依子：樹木画テスト，15-102，1986年，文教書院，東京。
- 15) 高橋雅春・高橋依子：人物画テスト，16-96，1991年，文教書院，東京。
- 16) Van Hasselt, V. B. & Hersen, H. : Handbook of Adolescent Psychology, 77-90, 100-101, 245-264, 381-397, 413-423, 1987, Pergamon Press, N. Y. Oxford etc.

- 17) ウィニコット・D・W (橋本雅雄訳) : 遊ぶことと現実, 1-134, 1979 年, 岩崎学術出版社, 東京.
- 18) ウィックス, F. G. (秋山さと子・國分久子訳) : 子ども時代の内的世界, 11-56, 107-136, 177-230, 1983 年, 海鳴社, 東京.
- 19) 若林慎一郎編 : 児童青年精神科, 189-227, 1989 年, 金剛出版, 東京.